HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐって
Author(s)	野町, 素己
Citation	スラヴ研究, 57, 27-57
Issue Date	2010
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47600
Type	departmental bulletin paper
File Information	SS57_002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐって[1]

野 町 素 己

1. はじめに

スラヴ諸語は、受動を表す文法（形態・統語）形式として、1. 助動詞（繋辞）＋受動過去分詞（主に be 動詞＋ n/t 受動分詞）、2. 再帰代名詞（東スラヴ諸語では動詞接辞 -ся）を有しているが[2]、西スラヴおよび南スラヴ諸語のいくつかの言語には、これらの 2 つの形式の他に、1 の変種である受容者受動構文が存在することが知られている[3]。受容者受動構文の基本的な構造は次の通りである。

1 本稿執筆にあたり Predrag Piper 教授（ベオグラード）、Hanna Popowska-Taborska 教授（ワルシャワ）、Romuald Huszcza 教授（ワルシャワ）、Bernd Heine 教授（ケルン）、John Ole Askedal 教授（オスロ）から専門的なご助言をいただいた。また、次の方々にアンケート調査、例文の提供および吟味にご協力いただいた。Renata Kiedrowska、Wojciech Kiedrowski、Roman Skwiercz、Stanisław Janke、Jaromira Labudda、Bogusława Labudda、Grzegorz Schramke、Iwona Makurat、Krystyna Lewna、Wanda Lew-Kiedrowska、Marian Selin、Ryta Konkel、Antoni Konkel、Marian Jelinski、Janusz Mamelski、Ida Czajina、Roman Drzeżdżon、Tomasz Fopke、David Shulist、Ludmiła Gołąbek、Eugeniusz Gołąbek、Witold Bobrowski、Halina Wreza。この場をお借りしてお礼申し上げる。尚、カシュブ語が 1 言語であるかポーランド語の方言であるかの議論に決着はついていないが、近年は政治的に「地域言語」としての地位を得たこともあって、カシュブ語を独立した 1 言語として扱うことが多いことを踏まえ、本稿でもカシュブ語として論じる。またカシュブ語は、その方言の多様さで知られているが、従来の方言区分は音声・音韻的特徴に基づくもので、本稿の分析となる統語的特徴に関して言えば、その差はさほど大きくはなく、本稿で扱う構文はカシュブ地方全域で確認されている。したがって、本稿では方言区分に踏み込まずに論を進める。

2 スラヴ諸語の受動態の包括的な類型研究の成果として Bohuslav Havránek の古典的名著である *Genera verbi v slovanských jazycích* I–II（Prague, 1928–1937）が挙げられるが、ここでは受容者受動構文は分析対象になっていない。近年では Francesca Fici Giusti の著作もあるが、Fici Guisti はカシュブ語を研究対象に含めず、また受容者受動構文についても上・下ソルブ語以外にその存在を認めていない。Francesca Fici Giusti, *Il passivo nelle lingue slave: Tipologia e semantica* (Milano: FrancoAngeli, 1994), pp. 33, 130–131.

3 当該構文には幾つかの用語がある。ドイツ語研究では、dativ Passiv（与格受動）、indirekte Passiv（間接受動）、*bekommen* Passiv（bekommen 受動）などが用いられている。スラヴ語研究では、ソルブ語研究の用語 indirektny pasiw を除いて特に定着した用語はない。尚、チェコ語における当該構文の先駆的な研究を行った František Daneš は pasívní diateze recipientní（受容者受動態）という用語を用いている。František Daneš, *Věta a text* (Prague, 1983), p. 33. また Markus Giger は recipient passive（受容者受動）という用語を提唱している。Markus Giger, “Die Grammaticalizierung des Rezipientpassivs im Tschechischen, Slovakischen und Sorbischen,” in Patrick Sériot, ed., *Contributions suisses as XIII^e congrès mondial des slavistes à Ljubljana, août*

（0） **1.** 主格主語 ＋ **2.** get 動詞 ＋ **3.** 受動過去分詞 ＋ **4.** 対格補語（＋ **5.** 副詞句）

このうち、1 の主格主語は get 動詞の活用語尾で、あるいは助動詞（be 動詞の諸形態）によってその存在が示される場合がある。4 の対格補語は構文の意味次第で実現しないことがあり、また行為者を表す 5 の副詞句は任意の要素である。以下の（1）–（6）は、西スラヴ諸語に属するチェコ語（Cz）、スロヴァキア語（Slk）、上ソルブ語（USo）、下ソルブ語（LSo）および南スラヴ諸語に属するスロヴェニア語（Sln）、ブルゲンラント・クロアチア語（BCro）における受容者受動構文の例である。

1　2　5　3

（1） Cz. Karel dostal (od otce) vyhubováno. [4]
カレルは、（父に）ひどく叱られた。

(1)2　3

（2） Slk. Za to dostal zaplatené rovnako ako vedecký pracovník. [5]
それに対し（彼は）研究者と同額が支払われた。

1　4　5　3　2

（3） USo. Hilža je suknju (wot maćerje) darjenu dóstała. [6]
ヒルジャは、（母に）スカートをプレゼントされた。

1　2　5　4　3

（4） LSo. Ja krydnu (wot mejstarja Suka) nowy woblek šyty. [7]
私は（職人スクに）新しい服を仕立ててもらう。

(1)　2　3　4

（5） Sln. In je dobil vrnjeno le puško. [8]
そして（彼は）銃だけ返された。

2003 (Bern: Peter Lang Verlagsgruppe, 2003), pp. 79–101. 本稿では recipient passive を採用し、その訳語として「受容者受動構文」をあてる。

4 例（1）および以後のチェコ語の例は次から取った。Daneš, *Věta a text*, p. 33.

5 例（2）および以後のスロヴァキア語の例は、スロヴァキア語電子コーパス Slovenský národný korpus より得た。[http://korpus.juls.savba.sk/] 2009 年 8 月 31 日閲覧。

6 この例文は次の文法書から取った。Helmut Faska, *Pućnik po hornjoserbšćinje* (Bautzen, 2003), p. 83.　尚、Ronald Lötzsch によると、ソルブ語では全方言において当該構文が認められるという。Ronald Lötzsch, “Někotre wuskutki němskeho sliwa na werbalny system serbšćiny,” *Beiträge zur sorbischen Sprachwissenschaft* (1968), pp. 337–344.

7 この例文および以後の下ソルブ語の例文は、次の著書から取った。Pětr Janaš, *Niedersorbische Grammatik* (Bautzen, 1976), p. 315.

8 Ronald Lötzsch は、スロヴェニア語には当該構文が存在しないと述べているが、これには賛同し

4 (1) 2 3

（6） BCro. Pismo je dostala poslano na novu adresu. [9]
（彼女は）新しい住所に手紙が届けられた。

例文（1）–（6）は、共通スラヴ語に由来する構文ではなく [10]、同構文を動詞のシステムとして有するドイツ語から文法構造のレプリカとして借用され、上記の言語が各々の文法体系に取り込んだ構文である蓋然性が高い [11]。その理由として、以下の相互に関わる 3 点が指摘できる。

かねる。Ronald Lötzsch, “Zum indirekten Passiv im Deutschen und Slawischen,” in W. Krauss, Z. Stieber, J. Bělič, V. I. Borkovskij, eds., *Slawisch-deutsche Wechselbeziehungen in Sprache, Literatur und Kultur* (Berlin: Instituts für Slawistik, 1969), p. 109. 以下にスロヴェニア語の例を幾つか挙げる。Predsednik SDS-a v Kranju in predsednik regijske koordinacije SDS-a za Gorenjsko dobil podarjeno v najem najbolj donosno bencinsko črpalko ob avtocestnem križu（訳：スロヴェニア民主党のクラニ支部長と同党ゴレンスコ地方地域調整部長は、幹線道路に最も適したガソリンポンプを贈られた）Poskrbel bom, da boš dobila plačano.（訳：君に支払われるかどうか、僕は気にかけるよ）。前者はスロヴェニア語電子コーパス Nova Beseda より得た。[http://bos.zrc-sazu.si/a_beseda.html] 2009 年 8 月 31 日閲覧。後者はスロヴェニア語電子コーパス FidaPLUS より得た。[http://iskanje.fidaplus.net/izbira_O.aspx] 2009 年 8 月 31 日閲覧。尚、以後のスロヴェニア語の例文は Nova Beseda より得たものである。尚、Rosanna Benacchio（私信）によると、イタリアに存在するスロヴェニア語の諸方言には受容者受動構文は存在しない。

9 この例文および他のブルゲンラント・クロアチア語の例文は、当該言語を母語とする言語学者 Ivo Sučić 氏からの提供を受けた。

10 尚、古代教会スラヴ語にも当該構文は存在しない。古代教会スラヴ語が古代ギリシャ語の統語構造を多く借用していることを考慮に入れたとしても、当該構文が共通スラヴ語に存在していた蓋然性は極めて低い。

11 Bernd Heine and Tania Kuteva, *The Changing Languages of Europe* (Oxford: Oxford University Press, 2006), pp. 253–256; Helmut Fasske, *Grammatik der obersorbischen Schriftsprache der Gegenwart: Morphologie* (Bautzen, 1981), pp. 221–224; Hanna Dalewska-Greń, *Języki słowiańskie* (Warsaw, 1997), pp. 449–450. 尚、上・下ソルブ語では当該構文において、スラヴ語由来の動詞 dóstać（上ソルブ語）、dostaś（下ソルブ語）の他にも、ドイツ語の動詞 kriegen からの借用 kry(d)nuć（上ソルブ語）、krydnuś（下ソルブ語）が用いられることからも明らかである。なお、ドイツ語の強い影響下にあり 18 世紀に死滅したポラブ語においては、やはりドイツ語の動詞 kriegen から借用した動詞 kryjoht が用いられていたことが知られているが、ここでは受容者受動構文の例がないため、当該構文がポラブ語に存在していたかどうかは不明である。Olesch Reinhold, *Thesaurus linguae dravaenopolabicae*, Band I (Böhlau, 1983), p. 480. カシュブ語においても、上述の動詞 kriegen から借用された動詞 krëgac が存在したが、この動詞は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて採録された Stefan Ramułt の辞典および Friedrich Lorentz の辞典以外には記載されていない。尚、Lorentz はこの動詞が全カシュブ地方で広く使われていると書いているが、現代のカシュブ地方では全く使われておらず、本稿のインフォーマントも誰もこの動詞を知らなかった。Stefan Ramułt, *Słownik języka pomorskiego czyli kaszubskiego*, 3rd ed. (Gdańsk, 2006), p. 139; Friedrich Lorentz, *Pomoranische Wörterbuch* (Berlin, 1958), pp. 377–378; Friedhelm Hinze, *Wörterbuch und Lautlehre der deutschen Lehnwörter im Pomoranischen (Kaschubischen)* (Berlin, 1965), p. 284.

このことに関連して興味深いのは、カシュブ語と同じようにドイツ語の影響を強く受けたポーランド語のシロンスク方言に受容者受動構文が存在しないということである。北シロンスク方言については Bogusław Wyderka 教授（私信）、上シロンスク中部方言については Jolanta Tambor

1. 上記の西および南スラヴ諸語は、歴史的にドイツ語文化圏に属しており、スラヴ語話者はドイツ語との 2 言語併用を長期にわたり経験している [(12)]。そのドイツ語では、受容者受動構文（いわゆる bekommen-Passiv）が動詞の（サブ）システムに存在し、高い頻度で用いられる。
2. ゲルマン諸語との言語接触が比較的弱い東および南スラヴ諸語（上記のスロヴェニア語とブルゲンラント・クロアチア語は除く）には当該構文が存在しない [(13)]。
3. ヨーロッパ諸語において、ゲルマン諸語を除き、受容者受動構文は比較的稀であるという言語類型論的事実が存在する [(14)]。

以下の例文（7）、（8）からもわかるように、カシュブ語においても、例文（1）–（6）と同様の構造を持つ受容者受動と思しき構文が存在する。これはカシュブ地方が数百年にわたりドイツ語文化圏に属し、ドイツ語を日常生活で用いる状態が続いていたことから [(15)]、当該構文もドイツ語からの文法的借用である蓋然性が高い。

教授（私信）、上シロンスク南部方言については Grzegorz Wieczorek 教授（私信）から情報の提供を受けた。また、Paul Wexler 教授（私信）によれば、やはりドイツ語の影響を強く受けたイディッシュ語にも当該構文は存在しないという。

ところで、ポーランド語には受容者受動構文が存在せず、当該構文の意味的な対応は無人称構文と与格で表された名詞か代名詞との組み合わせで実現される。Wręczono jej dokument（訳：書類は彼女に手渡された）、Powiedziano jej to trzy razy（訳：彼女はそれを 3 回言われた）、Dlaczego nie powierzono jej tego zadania?（訳：なぜ彼女にその課題は任されないのか？）。尚、以上のポーランド語の文のドイツ語訳は、それぞれ Sie bekam die Urkunde überreicht, Dreimal bekam sie es gesagt. Warum hat sie diese Aufgabe nicht übertragen bekommen となる。Ulrich Engel, *Deutsch-polnische kontrastive Grammatik*, Band 1 (Heidelberg: Julius Groos Verlag, 1999), pp. 655–656.

12 ソルブ語およびブルゲンラント・クロアチア語の話者は、現在でもドイツ語との 2 言語併用を続けている。

13 一部では 20 世紀初頭まで頻繁に続いたノルウェー語とロシア語の言語接触により、「ルセ・ノルスク」と言われるピジン言語が存在した。ノルウェー語には動詞 få（≒ bekommen）を用いた受容者受動構文が存在するが、厳密な統語的なルールがなく、複雑な構文が存在しないルセノルスク語のテクストには、当該構文と思しき例は見当たらなかった。Olaf Broch, “Russenorsk tekstmateriale,” *Maal og Minne*, no. 4 (1930), pp. 113–140.

14 Otto Jespersen は、能動態の動詞が二つの目的語をとる場合、その一つは対応する受動態の主語にすることができるが、そのような扱いを受けるのはたいてい直接目的語であり、多くの言語では能動態のときに与格であるものを受動態で主語にすることが難しいことを指摘している。オットー・イェスペルセン（安藤貞男訳）『文法の原理（中）』岩波書店、2006 年、95 頁。尚、当該構文についてより広い言語類型論的な見地から検証した Heine and Kuteva は、ヴェトナム語、朝鮮語、古期・中期漢語などにも意味的に get （receive, obtain）に対応する動詞が受動態のマーカーとして文法化することを指摘している。Bernd Heine and Tania Kuteva, *World Lexicon of Grammaticalization* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), pp. 142–147.

15 第 2 次世界大戦までのカシュブ人は、母語のカシュブ語のほかに、行政・教育の言語としてドイツ語を、教会での言語としてポーランド語を併用していた。つまりカシュブ語は、家庭周辺での非公式な状況で用いられる言語であった。その他に、地域によっては低地ドイツ語を話す者も存在したことが知られている。カシュブ地方の言語使用状況の歴史については、次を参照されたい。Ludwik Zabrocki, “Związki językowe niemiecko-pomorskie,” in Zdzisław Stieber, ed., *Konferencja pomorska 1954* (Warsaw, 1956), pp. 149–174.

4 (1)2　　3

（7） Czej gò dostelë pòtemù przëdzelóné, Béta z nima tuszowa. (H. Dawidowski)
後になって（彼らに）それが分与されたとき、ベタは彼らとの関係を解消した。

1　　2　　3

（8） Ruta nierôz dostôl wczubaszóné (J. Drzeżdżon)
ルタは一度ならず引っ叩かれた。

しかし、これまでのカシュブ語の記述文法や標準語（規範）文法の試みにおいて、受容者受動構文が形態論あるいは統語論の枠組みで何らかの文法カテゴリーとして記述・分析されることは皆無であった。また、カシュブ語の受容者受動を研究対象とした個別の研究もこれまでに存在しておらず[16]、カシュブ語文法において言及される受動態とは、主に上述の「助

16 カシュブ語の形態統語論研究の遅れには幾つかの理由がある。まず、カシュブ語研究が本格的に始まったのが 19 世紀末からで、その研究手法が通時的な音声研究に重きをおく若手文法学派の手法だったことによる（主に Lorentz の研究）。後にポーランドの研究者も研究が進めたが、あくまでもポーランド語の方言として研究され、ポーランドの方言研究の伝統にそって、主に音声・音韻、形態、語彙の研究が中心となったことが原因である。また標準語（規範）文法に関して言えば、とりわけカシュブ語の表記法の問題、すなわち音声・音韻と形態の問題が議論の中心であったため、（形態）統語論は十分に扱われてこなかったという経緯がある。尚、数少ない統語論研究として Jan Piotrowski によるスロヴィンツ方言におけるドイツ語からの統語的借用要素に関する著作があるが、ここでも受動者受容構文は言及されていない。Jan Piotrowski, *Składnia słowińska wobec wpływów języka niemieckiego* (Wrocław, 1981).

尚、本研究において参照した文法書およびまとまった文法記述のある文献は以下の通りである。Florian Ceynowa, *Zarés do gramatikj kaszebsko kašébsko-slovjinskjè move* (Poznań, 1879); Friedrich Lorentz, *Slovinzische Grammatik* (St. Petersburg, 1905); Friedrich Lorentz, *Kaschubische Grammatik* (Danzig, 1919); Friedrich Lorentz, *Geschichte der pomoranischen (kaschubischen) Sprache* (Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1925); Mikołaj Rudnicki, *Przyczynki do gramatyki i słownika narzecza słowińskiego* (Kraków, 1913); Fryderyk Lorentz, *Gramatyka pomorska*, tom III (Wrocław, 1962); Aleksander Majkowski, *Gramatyka kaszubska* (タイプ原稿、1930 頃); Aleksander Labuda, *Gramatyka kaszubska* (タイプ原稿、1980 年頃); Edward Breza and Jerzy Treder, *Gramatyka kaszubska* (Gdańsk, 1980); Edward Breza and Jerzy Treder, *Zasady pisowni kaszubskiej* (Gdańsk, 1984); Eugeniusz Gòłąbk, *Wskôzë kaszëbszégò pisënkù* (Gdańsk, 1997); Florian Ceynowa, “Móje spóstrzeżenjo prze przezeranju wuvog Ismaela Sreznjevekjeho nad mówą kaszebską,” in Jerzy Treder and Hanna Popowska-Taborska, eds., *Słownik kaszubski Floriany Ceynowy* (Wejherowo, 2001); Frantz Tetzner, *Die Slowinzen und Lebakaschuben* (Berlin: Verlag von Emil Felber, 1899); Florian Ceynowa, *Kurze Betrachtungen über die kassubische Sprache als Entwurf zur Grammatik* (Götttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998); Jan Louis Perkowski, *A Kashubian Idiolects in the United States* (Bloomington: Indiana University Publications, 1969); Gerald Stone, “Cassubian,” in Bernard Comrie and Greville G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages* (London: Routledge, 2002); Aleksandr Gilferding, *Ostatki slavian na iuzhnom beregu Baltiiskago moria* (St. Petersburg, 1862); Timofei Florinskii, *Lektsii po slavianskomu iazykoznaniu*, vol. 2 (Kiev, 1897); Aleksandr Dulichenko, “Kashubskii iazyk,” in A. M. Moldovan, S. S. Skorvid, A. A. Kibrik, eds., *Iazyki Mira: Slavianskie iazyki* (Moscow, 2002). Bernald Sychta によるカシュブ方言辞典 *Słownik gwar kaszubskich na tle kultury ludowej* V (Wrocław, 1972) の見出し語 dostac には当該構文の記

動詞（連辞）＋受動過去分詞」タイプであり、Jerzy Treder は「特にカシュブ語が際立つような特徴的な点はないが、口語では受動態が比較的多く使われることが指摘できる」と述べるに留まっている[17]。

カシュブ語の受容者受動構文に初めて言及したのは、恐らく Ronald Lötzsch である。Lötzsch の研究はソルブ語の受容者受動構文の研究であり、そこではスロヴィンツ方言も含めたカシュブ語の構文にも触れているが、20 世紀初頭に記録された方言テクストを元に副次的に言及したにすぎず、具体的な分析や記述は行われることはなかった[18]。

以上に鑑み、本稿では、まず当該構文の分析する方法論を述べ（2 章）、続いて受容者受動構文分析に先立つ仮説を述べる（3 章）。次に、当該構文の共時的側面における文法（形式）的および意味（機能）的特徴およびその成立条件をめぐる記述と分析を行う（4 章と 5 章）。続いて、当該文法カテゴリーの通時的側面を分析し、カシュブ語文法システム内における受容者受動構文の位置づけを考察する（6 章）。

2. 分析手法および分析対象（コーパス）

カシュブ語の受容者受動構文はこれまで文法カテゴリーに含まれてこなかった構文であるから、まずは当該構文が文法カテゴリーとして扱われるべきか否か、すなわち dostac（get 動詞）[19] と受動過去分詞が共起する必然性の有無を検証する必要がある[20]。これを示すにあたり、本稿では Bernd Heine や Tania Kuteva らが提唱する「文法化理論」に基づき、当該カテゴリーを「文法化の度合い」という観点から考察する。

述がなく、また Friedrich Lorentz による Pomoranisches Wörterbuch I の見出し語 krëgac には、Ten prachôrz krëgôł pôrą skórzeń pódaróné（訳：この乞食は長靴を一足貰った）、dostac の項目には òn dostôł tą skórą dobrze zapłaconé（訳：彼はその毛皮代としてよい金が支払われた）が見つかるが、具体的な意味や文法的な解説はない。

17 Jerzy Treder, “Strona,” in Jerzy Treder, ed., *Język Kaszubski, Poradnik Encyklopedyczny* (Gdańsk, 2006), p. 250. 尚、Treder は、口語で頻繁に用いられる受動態の例としてドイツ語から借用した構文 *òni są jidzony*（訳：彼らは行ってしまった）、*òn je wëjachóny*（訳：彼らは出発してしまった）を含めているが、これには賛成しかねる。これらは形式の面（過去分詞は自動詞から派生、結合価に変化なし）、意味の面（能動性）双方から判断して受動態ではなく、あくまでも能動体の一形式であり、一部の動詞、とりわけ「移動動詞」の特殊形式として動詞パラダイムに含められるべき形式である。

18 Lötzsch, “Zum indirekten Passiv,” pp. 102–109; Lötzsch, “Někotre wuskutki němskeho sliwa,” pp. 337–344.

19 dostac は完了体動詞で、ペアとなる不完了体動詞は dostawac である。本稿では必要がない限り dostac で代表させる。

20 Talmy Givón に従えば、個々の要素が孤立的から分析的形式へ変化した段階、すなわち「統語化（syntacticization）」が実現しているかどうかということである。尚、Givón は「統語化」よりも高度な段階として分析的形式から統合・膠着形式への変化である「形態化（morphologization）」、さらに統合・活用形式への変化である「脱形態素化（demorphemicization）」の段階を合わせて「文法化」としている。Talmy Givón, *On Understanding Grammar* (New York: Academic Press, 1979), pp. 208–209.

2-1.「文法化」について

文法化の定義をめぐる議論は様々であるが、最も一般的には以下のように定義することができる[21]。

文法化：非文法要素である語彙素あるいは語彙項目が文法要素に変容する、また文法的形式がより高度な文法的形式に変容するプロセス[22]。

すなわち、これは自立的な要素が拘束的な要素へ体系的に機能変容することであり、それは既存の文法カテゴリーに組み込まれるか、あるいは新しい文法カテゴリーに生まれ変わるまでの段階的な変化である[23]。

文法化に関わる現象は多種多様であるが、言語類型論研究の成果から知られている文法化のメカニズムは、次の相互に影響しあう 4 点に集約される[24]。

1. 脱意味化（desemanticization）（あるいは「漂白化」、意味の縮約）：意味内容の消失
2. 拡張（extension）（あるいは文脈的一般化）：新たな文脈における使用

---

21 文法化に関する研究史を踏まえた定義と議論については、次を参照されたい。Bernd Heine, Urlike Claudi, Friederike Hünnemeyer, *Grammaticalization: A Conceptual Framework* (Chicago: The University of Chicago Press, 1993), pp. 3, 16, 77, 148; Joan Bybee, Revere Perkins, William Pagliuca, *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World* (Chicago: The University of Chicago Press, 1994), pp. 4–9; Christian Lehmann, *Thoughts on Grammaticalization* (München: Lincom Europa, 1995), pp. 1–22; ポール J. ホッパー・エリザベス C. トラウゴット（日野資成訳）『文法化』九州大学出版会、2003 年、25–41 頁。

22 この定義は Jerzy Kuryłowicz の研究に端を発するものである。Kuryłowicz によると、文法化とは、「語彙から文法のステータスへ、あるいは文法の度合いが低度なものから高度なものへと進むことによる形態素の幅の拡大」であるという。Jerzy Kuryłowicz, *Esquisses linguistique* II (München: Wilhelm Fink Verlag, 1975), p. 52.

23 Henning Anderson は、デンマーク語の助動詞 turde（法助動詞→語彙動詞）、ポーランド語の助動詞 być（助動詞→参与者マーカー）、中世ロシア語の助動詞 бытн（助動詞→代名詞）など、文法的要素がそれ以外の要素（例えば語彙的要素など）に再解釈される例を挙げているが、本稿に関わる問題ではないのでここでは論じない。Henning Anderson, “Grammaticaliztion in a Speaker-Oriented Theory of Change,” in Thórhallur Eythórsson, ed., *Grammatical Change and Linguistic Theory* (Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2008), pp. 22–23.

24 Heine and Kuteva, *World Lexicon of Grammaticalization*, pp. 2–5; Bernd Heine and Tania Kuteva, *Language Contact and Grammatical Change* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), pp. 79–80; Bernd Heine and Tania Kuteva, *The Genesis of Grammar* (Oxford: Oxford University Press, 2007), pp. 32–44. 尚、文法化には言語の使用、すなわち語用論的な側面も重要であることに注意する必要がある。例えば Joan Bybee が指摘しているように、「使用頻度の高さ」が文法化のプロセスと直接的に関係することは重要である。すなわち、使用頻度の高度化により、所与の使用形式の自動化に繋がり、そのため新しい文脈で用いられ（上記の「拡張」）、さらに「脱意味化」、また「侵食」へと発展することが言語類型論研究で明らかになっている。Joan Bybee, “Mechanisms of Change in Grammaticalization: The Role of Frequency,” in Brian D. Joseph and Richard D. Janda, eds., *The Handbook of Historical Linguistics* (Oxford: Blackwell Publishing, 2008), pp. 602–623.

3. 脱カテゴリー化（decategorialization）：文法化される形式の形態統語的特徴の消失、自立的特徴のステータスの消失も含む（接語化、接辞化）
4. 侵食（erosion）（あるいは音韻的縮約）：音声的な内容の消失 [25]

1 は意味論的要素、2 は意味論的かつ語用論的要素、3 は文法的要素、4 は音声・音韻的要素である。つまり文法化は言語の内的側面と外的側面の総合的変容であるから、基本的には意味の変化と形式の変化には、一定の連動性がある。

所与の言語現象が、以上のメカニズムにより文法化のプロセスに進んだ結果、最終的には次のような言語構造の変化の傾向を示すことが、これまでの言語類型論研究の成果から明らかになっている [26]。

1. パラダイム化（paradigmatization）：文法化された形式はパラダイムに適応される傾向
2. 義務化（obligatorization）：選択的形式が義務的になる傾向
3. 縮約化（condensation）：形式の短縮化
4. 融合（coalescence）：隣接する形態素との融合
5. 固定化（fixation）：自由な語順が固定化

また、上記のメカニズムで生じる変化には、以下のような普遍的法則がさまざまな言語に共通して認められる [27]。

1. 蓄積（layering）：新しいタイプが生成しても、古いタイプは必ずしも消失するとは限らず、双方が共存し、それぞれのタイプ同士で相互的に作用する
2. 分岐（divergence）：ある言語形式に文法化が進行するとき、元の形式はそのまま使用され、文法化された形式と文法化されない形式が並存しうる
3. 特化（specialization）：文法化の進行とともに形式の多様性は縮小し、選択の幅が狭いほど、より一般的な意味を有する
4. 持続（persistence）：文法化した要素には、文法化以前に有していた意味的特徴が残存し、その特徴が当該要素の文法的位置に関係する
5. 脱カテゴリー化（decategorialization）：文法化が進行すると形態的特徴が失われるか、あるいは中性化が生じ、名詞や動詞といった中心的カテゴリーの統語的な特徴が消失し、

25 しかし Heine and Kuteva が指摘するように、この要素は必須ではない。例えば、ドイツ語の複合時称形で助動詞として用いられる haben は、所与の構造が極めて高度に文法化しているにも関わらず、音の弱化は全く認められない。Heine and Kuteva, *The Genesis of Grammar*, p. 42.　同じ理由から 3「縮約化」、4「融合」も典型的な変化ではあるが、必須ではない。

26 次を参照されたい。Christian Lehmann, “Grammaticalization: Synchronic Variation and Diachronic Change,” *Lingua e stile* 20, no. 3 (1985), pp. 303–318; Bernd Heine, “Grammaticalization,” in Joseph et al., eds., *The Handbook of Historical Linguistics*, p. 588.

27 次を参照されたい。Paul Hopper, “On Some Principles of Grammaticalization,” in E. Traugott and B. Heine, eds., *Approaches to Grammaticalization* (New York: John Benjamins Publishing, 1991), pp. 17–37; Heine, “Grammaticalization,” p. 589.

形容詞、分詞、前置詞といった周縁的カテゴリーの特徴を得る（メカニズム 3 参照）

以上に述べた文法化のメカニズム、それによって生じる構造変化の傾向、そしてそこに見られる文法化の普遍法則を本稿の議論の前提とし、カシュブ語の受容者受動構文の分析・記述を行う。

2-2. 分析対象（コーパス）について

本研究では、大きく分けて 4 つの性質の異なるテクストデータをコーパスとした。

1. カシュブ語文学テクスト（19 世紀後半から現代まで）
2. カシュブ語方言テクスト
3. カシュブ語（の要素を含む）歴史的テクスト
4. インフォーマント調査で得られた例文

1 は、文体的差異も含めた現代カシュブ語の言語状況を示すコーパスである。カシュブ語文学初期の Florian Ceynowa （1817–1881）の著作以来、今日活躍する数多くの詩人、作家、エッセイストおよびジャーナリストの作品までを網羅した。いずれも現在形成しつつあるカシュブ標準語のコーパスとして扱われるテクストである [28]。

2 は、19 世紀中ごろから 20 世紀半ばまでに記録されたさまざまなカシュブ語の方言のテクストである [29]。本稿では 20 世紀半ばに死滅したスロヴィンツ方言のテクストも分析対象とした [30]。

3 は、16–17 世紀頃に宣教活動に用いられた教理指導書と演劇作品である。前者はドイツ語からの翻訳であり、土着のカシュブ人に理解できるように、カシュブ語の要素を含んだポーランド語で書かれているとされる。後者は作品中の登場人物にカシュブ人の役があり、カシュブ語の要素が散見されるものである [31]。

---

28 尚、参照したテクストは極めて多いため、本稿では例文の後に作家名を挙げるにとどめる。

29 参照したテクストは次の通り。Gilferding, *Ostatki slavian*; Stefan Ramułt, *Słownik języka pomorskiego czyli kaszubskiego* (Kraków, 1893). この 2 点には付録としてテクストが付けられている。Gotthelf Bronisch, *Kaschubische Dialectstudien* II *Texte in der Sprache der Bëlôcë nebst Anhang* (Leipzig, 1898); Friedrich Lorentz, *Slovinzische Texte* (St. Petersburg, 1905); Rudnicki, *Przyczynki do gramatyki*; Friedrich Lorentz, *Teksty pomorskie* (Kraków, 1924); Zuzanna Topolińska, “Teksty gwarowe centralnokaszubskie z komentarzem fonologicznym,” *Studia z Filologii Polskiej i Słowiańskiej* VII (1968), pp. 87–125; Zuzanna Topolińska, “Teksty gwarowe południowokaszubskie z komentarzem fonologicznym,” *Studia z Filologii Polskiej i Słowiańskiej* VI (1966), pp. 115–141; Zuzanna Topolińska, “Teksty gwarowe północnokaszubskie z komentarzem fonologicznym,” *Studia z Filologii Polskiej i Słowiańskiej* VIII (1969), pp. 67–93.

30 上述 Lorentz はスロヴィンツ方言を独立の言語と考えていたが、その後の研究によりスロヴィンツ方言と隣接するカバト方言は北カシュブ方言と一体をなし、カシュブ語の一方言であることが明らかになっている。本稿でもこれに従い、分析対象にスロヴィンツ方言のテクストを含める。Ewa Rzetelska-Feleszko, “Słowińcy,” in Treder, ed., *Język Kaszubski*, pp. 231–233.

31 参照したテクストは次の通り。Friedhelm Hinze, ed., *Altkaschubisches Gesangbuch* (Berlin, 1967); Friedhelm Hinze, ed., *Die schmolsiner Perikopen* (Berlin, 1967); Jerzy Treder, ed., *Tragedia o Bogaczu i Łazarzu* (Gdańsk, 1999).

書き留められたテクストだけでは構文の使用環境や容認度に関して判断がつかないことを踏まえ、カシュブ語のインフォーマントに対話式のアンケート調査を行った[32]。この結果が上記 4 のコーパスである。インフォーマントの選択基準として、特にカシュブ語で執筆活動を行う話者を中心に選んだ。その理由は、カシュブ語は現在標準化の過程にあり、文筆活動を行う優れたカシュブ語の話し手は、機能的文体差異への意識が高く、標準語の成立に本質的な役割を担うからである。この意味において、4 は 1 に準ずる。

尚、本稿ではアンケート調査で得られた例文も文筆家の言語であるから、他のカシュブ語の文学作品からの例同様にインフォーマントの名前をカッコ内に記す[33]。

3. 受容者受動構文をめぐる仮説

もし例文（7）、（8）が受動態としてカシュブ語の文法システムに組み込まれているのであれば、文法化のプロセスを経た結果、dostac は語彙動詞の他に助動詞としてのステータスを有し、受動過去分詞とともに動詞の分析的一形式をなしパラダイムに含まれているはずである。もしこの仮説が正しければ、以下の例文（9）、（10）に含まれる dostac は、それぞれ同音異義語ということになる。そしてその分岐のプロセスは、他の文法化のケース同様に段階的変化が予想される。

（9） Òn dostôł sztëczk pòla.
彼は僅かな農地を得た。

（10） Òn dostôł sztëczk pòla wëdzelóné. (G. Schramke)
彼は僅かな農地を分け与えられた。

以下、この仮説を、まず構文の各要素を形態論のレベルで分析を行い、続いて統語論のレベルでの分析から証明することを試みる。次に、構文成立の条件を意味論のレベルから考察し、その意味特徴を明らかにする。

4. 受容者受動構文の文法的特徴

4-1. 形態論的な特徴

4-1-1. 受動過去分詞の形態の「義務化」

2-1. で、文法化によって生じる変化の帰結として「義務化」に言及した。これはメカニズ

32 尚、対面調査の必要性は文法化のメカニズム 4「侵食」による音声的弱化の有無を確認する必要があったこともある。しかし対面調査の結果、音声的弱化、その結果として 3「縮約化」や 4「融合」は一切起こっていないことが確認できた。したがって本稿では以下文法化に関わる音声の側面は扱わない。

33 アンケートの作成には、Marek Cybulski による与格支配動詞のリストを基本とした。Marek Cybulski, *Rząd czasowników w kaszubszczyźnie* (Gdańsk, 2001), pp. 92–105.

ム 3「脱カテゴリー化」により本来備わっていた形態統語的特徴を失い、典型的には不変化の中性形が用いられることである。この現象はさまざまなスラヴ語において、特に動詞カテゴリーの文法化の現象で広く知られている。以下、カシュブ語（Kas）、マケドニア語（Mac）、北ロシア方言（NorR）の所有完了の例およびウクライナ語（Ukr）の一般人称文の例を挙げる。

（11） Kas. Të doch ju téż môsz zabëté, jak ma bëla mlodi ? (J. Drzeżdżon)
まったく君も我々が若かったことを、もう忘れてしまったのか？

（12） Mac. Кога ти дојде тој веќе ја имаше прочитано книгата. [34]
君が来たとき、彼はもうその本を読み終わっていた。

（13） NorR. У его картошки-то не едено. [35]
彼はそのジャガイモを食べなかった。

（14） Ukr. Роботу покинуто. [36]
仕事が放棄された。

これらの構文において、受動過去分詞が中性単数形であることに選択の余地は無く「義務的」である。これと同じことが例文（15）–（18）に見られるカシュブ語の受容者受動構文においても指摘できる。

（15） Na geburstach òn dostôł pòdarowóné fejn kòszlã. (K. Lewna)
誕生日に彼は素敵な服をプレゼントされた。

（16） Praktikańt pògrzébòwi firmë dostôł nakôzóné zawiezc ùrnã z prochama jednégò chłopa gdowie pò nim. (T. Fopke)
葬儀会社の見習いは未亡人に故人の遺灰の入った骨壷を持って行くように命じられた。

（17） Jô dostôł wëpłacóné za mòjã robòtã. (S. Janke)
私の仕事に対して支払われた。

（18） Chòc nierôz dostôł mocno wsmarowóné...(S. Janke)
彼は一度ならず強く引っ叩かれたのではあるが…

---

34 Olga Mišeska-Tomić, *Balkan Sprachbund: Morpho-syntactic Features* (Dordecht: Springer, 2006), p. 343.

35 I. B. Kuz’mina, E. V. Nemchenko, *Sintaksis prichastnykh form v russkikh govorakh* (Moscow, 1971), p. 75.

36 Dalewska-Greń, *Języki słowiańskie*, p. 448.

本稿で用いたカシュブ語コーパスにおいて、またインフォーマントから得た情報では、受動過去分詞はあらゆる統語的条件ですべて中性単数形であった。このことから、当該構文に含まれる受動過去分詞は、既に分詞としての文法カテゴリー的特徴を失っていると言える。

これに対し、チェコ語、スロヴァキア語、上・下ソルブ語、スロヴェニア語は、受動過去分詞は常に補語の名詞と性・数・格で一致し、名詞句の補語がないときのみ中性形が用いられる。(19)、(21)、(23)、(25)、(27) が前者の例であり、(20)、(22)、(24)、(26)、(28) が後者の例である。

(19) Cz. Karel dostal od národního výboru přidělenu // -nou garsoniéru.
カレルは国民議会よりアパートを割り当てられた。

(20) Cz. Karel dostal od otce přikázáno, aby se vrátil včas.
カレルは父からきちんと帰るように命じられた。

(21) Slk. Každý reprezentant mesta dostal pridelené partnerské mesto s približne.
どの町の代表も近くのパートナーの町を割り当てられた。

(22) Slk. Veľmi veľa krát som dostal vynadané.
私は何回も何回も怒られた。

(23) USo. Jan dósta mzdu wupłaćenu.
ヤンは給料が支払われた。

(24) USo. Wón dóstanje wot wšitkich pomhane.
彼はみんなから助けられる。

(25) LSo. Buźomy krydnuś nowu mašinu konstruowanu.
我々は新しい機械を設計してもらえるだろう。

(26) LSo. A wuporěźone krydnuł, ale pśed tyźenjom jo zamrěł.
彼は治療を受けたが、しかし、ああ、一週間前に死んでしまった。

(27) Sln. Slovenija je v zadnji minuti dobila podarjeno enajstmetrovko.
スロヴェニアは最後にペナルティーキックを与えられた。

(28) Sln. Bodo rejci torej dobili plačano po enakih pogojih.
したがって畜産家はそれぞれ同じ条件で支払われる。

尚、ブルゲンラント・クロアチア語はこれらの中間的な地位を占めると考えられる。受動過去分詞が補語の名詞と性・数・格で一致する場合（29）と一致しない場合（30）の双方の可能性が観察されるからである[37]。

（29） BCro. Knjigu ćeš dostat nohihićenu.
君はこの本（女性単数対格）を容易に貰える（女性単数対格）だろう。

（30） BCro. Te tablete je dostao od doktora prepisano.
この錠剤（男性複数対格）は、医者に処方してもらった（中性単数）。

以上のことから、受容者受動構文を持つ他のスラヴ語と比較して、受動過去分詞が常に中性単数形で不変化であるカシュブ語の当該構文には、高度な「義務化」が指摘できるのであり、少なくとも形式的にはより高い文法化の度合いを呈していると結論付けられる。

4-1-2. パラダイム化

2-1. では文法化の構造的な帰結の一つとして「パラダイム化」に言及した。既に問題提起したように dostac ＋受動過去分詞という形式が、任意の偶発的な語の連続ではなく、動詞の一形式（助動詞＋受動過去分詞）として語形変化表に組み込まれているかどうかということである。

4-1-1. で指摘したように、カシュブ語の受容者受動構文で用いられる受動過去分詞は中性単数形でかつ不変化であるが、これは語彙動詞 dostac が本来的に有していた格支配が、助動詞に変化した dostac では部分的に失われていることを意味している。例えば（10）では、補語の sztëczk「ひとかけら」は男性名詞の単数対格形であるが、中性単数形の受動過去分詞にはこの補語との文法的一致はない。女性名詞 kòszla「洋服」が対格形で現れている（15）も同様である。

このことはカシュブ語のいわゆる「否定属格」の使用からも確認できる[38]。例文（31）が示すように、カシュブ語では他動詞が否定される場合には、その直接目的語は対格ではなく属格で表されることが知られている。

（31） Ale przódë Kaszëbi nie zażiwelë tobaczi ani nawetka ji nie znalë. (J. Mamelski)
しかし以前カシュブ人はタバコ（女性単数属格）を吸わなかったし、それ（女性単数属格）を知りさえもしなかった。

---

37 但し、別のインフォーマント Sabine Pawischitz 氏によると、受動過去分詞は中性形が義務的であり、その他の形は認められないという。cf. Dostala sam vlase poriženo（訳：私は髪を切ってもらった）。この文において vlase「髪」は女性名詞の複数対格形で、受動過去分詞 poriženo「切られた」は不変の中性単数形である。

38 Lorentz によると、他動詞が否定される場合でも、その直接目的語が対格で実現する場合もあるという。Lorentz, *Gramatyka pomorska* II, p. 1195.

例文（32）のように、これは動詞が分析的形式（助動詞 miec ＋受動過去分詞の中性単数形）の場合でも有効である。属格で実現するのは目的語の名詞句のみであり、受動過去分詞（例文では wëbróné）は不変化である。

（32） Diôbeł ni miôł wëbróné niżódnégò kama. (J. Mamelski)
悪魔はどの石（男性単数属格）も選ばなかった。

これと全く同じように、受容者受動構文を否定文にすると、やはり直接目的語の名詞句のみが属格で実現する（例文（33））[39]。文に目的語の名詞句が存在しない場合にも、受動過去分詞は属格形で実現することはない（例文（34））。

（33） Òna tegò nie dosta wëdzelóné. (S. Janke)
彼女はそれ（中性単数属格）を分け与えられなかった。

（34） Òn nie dostôł wczubaszóné. (J. Labudda)
彼は引っ叩かれなかった。

（35） *On nie dostôł wczubaszónégò.

また、当該構文では予期される対格補語に代わって、動詞不定形（36）や従属節（37）、（38）といった形式も可能な場合がある。

（36） Praktikańt pògrzébòwi firmë dostôł nakôzóné zawiezc ùrnã z prochama jednégò chłopa gdowie pò nim. (T. Fopke)
葬儀会社の見習いは未亡人に故人の遺灰の入った骨壷を届けるように命じられた。

（37） Jonk dostôł nakôzóné, żebë sprzątnąc pòdwòrzé. (K. Lewna)
ヨンクは中庭を掃除するように命じられた。

（38） Òn dostôł przëòbiecóné, że jak òn sã bãdze dobrze ùcził, to òn dostónié kòmpùter. (G. Schramke)
もしよく勉強したらパソコンをもらえると彼は約束してもらった。

多くの場合、対格名詞が動詞 dostac に支配される必須の要素であり、受動過去分詞が修

39 尚、インフォーマントの中には否定属格が分詞にも現れる Òna tegò nie dosta wëdzelonégò という文を容認する者もあったが、例文（31）のように否定属格が直接目的語にのみ現れるタイプの方が自然であるという意見が圧倒的であった。この「揺れ」は、当該構文が完全には文法化していないことを示唆する。しかし直接目的語がない例(35)はインフォーマント全員が不適格とした。

飾的な副次的な要素であったことが本来の形式であり、基底構文において動詞 nakazac「命じる」および przëòbiecac「約束する」がそれぞれ動詞不定形や従属節をとることを踏まえると、(36) –(38) は当該構文が動詞の分析的形式となっていることを証明するものでもある。

以上のことから、dostac と受動過去分詞は偶然に共起した独立的な統語要素の連続ではなく、例文 (32) に挙げた複合時称「助動詞 miec ＋受動過去分詞」の場合と同様、分析的な一形式として動詞パラダイムに含まれていると考えられる。

dostac+ 受動過去分詞は、例えば、1. 命令形が形成されない、2. 受動態が形成されない、3. 受動過去分詞は完了体の動詞からのみ派生される [40]、といった制限があり、また注 39 に指摘したような若干の形式的な「揺れ」を呈しているものの、受動過去分詞の固定的な「中性化」および「助動詞＋受動過去分詞」としての「パラダイム化」が確認され、少なくとも形式的には比較的高度な文法化の特徴を呈していると言える。

4-2. 統語論的な特徴

4-2-1. 基底構文および受動構文の相互関係

Viktor Khrakovskii の定義に従って [41]、受動構文は基底構文から派生した構文と捉えた場合、受動構文は文中における動作主のランクを下げた構文であり、その結果以下のような変化が生じる [42]。

基底構文　⇒　受動構文
1. 主格主語　⇒　任意の要素（ゼロ、あるいは動作主を表す副詞句）
2. 斜格補語　⇒　主格主語

これに従うと、受動構文における動詞の結合価 X は、最も満たされている基底構文の動詞

40 これらのパラダイム的「欠陥」は、意味的な理由によるものでもある。筆者の調査では、当該構文においては、どのインフォーマントも不完了体動詞から派生した受動過去分詞を容認しなかったが、一例だけ不完了体派生の受動過去分詞が用いられている例があった。Taczi tekst dostôł jem dolmaczoné na miemiecczi jãzëk (B. Labudda)（訳：私はそのテクストをドイツ語に翻訳してもらった）。動詞 dolmaczëc はドイツ語の動詞 dolmetschen からの借用語であり、借用語がしばしば両体動詞であることを踏まえると、この動詞もカシュブ語では両体動詞であり、完了体の意味で用いられた可能性がある。興味深いことに、上・下ソルブ語では不完了体からも受容者受動構文が作られることが知られている。例えば、Lenka Scholze は płaćene krónć、šite krónć（krónć は krydnuć の口語形）といった不完了体動詞 płaćić「払う」や šić「縫う」派生の受動過去分詞の例を挙げているが、同時に両体動詞の可能性があることも指摘している。Lenka Scholze, *Das grammatische System der obersorbischen Umgangssprache im Sprachkontakt* (Bautzen: Domowina-Verlag, 2008), p. 201.

41 V. S. Khrakovaskii, “Passivnye konstruktsii,” in A. A. Khorodovich, ed., *Tipologiia passivnykh konstruktsii: diatezy i zalogi* (Leningrad, 1974), pp. 12–13.

42 ここでは John Askedal によるドイツ語の bekommen Passiv の統語分析を分析のモデルとして参照した。詳しくは次を見られたい。John Ole Askedal, “Grammaticalization and Persistance in the German ‘Dative/Recipient Passive’ with bekommen/kriegen/erhalten,” *Interdisciplinary Journal for Germanic Linguistics and Semiotic Analysis* 6, no. 1 (2001), pp. 107–134.

の結合価 N–1 ということになる。このことを踏まえて[43]、以下の（39）–（40）と（41）–（42）を比較されたい[44]。

（39） Òn przeczëtôł lëstk.（結合価 2）
彼は手紙を読みおえた。

（40） Lëstk je / òstôł przeczëtóny (òd / przez / bez niegò).（結合価 1 ＝ 2–1）
手紙は（彼によって）読まれた。

（41） Òn dôł ji dëtczi.（結合価 3）[45]
彼は彼女にお金を与えた。

（42） Dëtczi są / òstałë ji dóné (òd / przez / bez niegò).（結合価 2 ＝ 3–1）
お金は（彼によって）彼女に与えられた。

これらの事実および 4-1-2. で言及した「パラダイム化」を踏まえた上で、以下の（43）–（45）を比較すると、対格補語を主格化した受動構文と同じように、受動者受容構文においても結合価が一つ減少していることがわかる。

（43） Òn to ji wëdzelił.（結合価 3）
彼は彼女にそれを分け与えた。

（44） To je / òstôło ji wëdzelóné (òd / przez / bez niegò).（結合価 2 ＝ 3–1）
それは（彼によって）彼女に分け与えられた。

（45） Òna to dosta wëdzelóné (òd / przez / bez niegò).（結合価 2 ＝ 3–1）
彼女は（彼によって）それを分け与えられた

---

43 Lucien Tesnière の定義によると、結合価とは動詞が支配できる行為項の数のことである。典型的には、結合価 1 価の動詞は自動詞、2 価の動詞は他動詞、3 価の動詞は言明動詞（verbe de dire）と授与動詞（verbe de don）である。また、受動化は行為項の数を減少させる操作であり、Tesnière は後退態質（diathèse récessive）の 1 つとして扱っている。ルシアン・テニエール（小泉保監訳）『構造統語論要説』研究社、2007 年、270、295–296、315 頁。

44 結合価の減少に関して、カシュブ語の人称文 òni bądą tańcowac tu（訳：彼らはここでダンスをするだろう。結合価 1）を形式的に「受動化」した一般人称文 bądze tańcowóné tu（訳：ここでダンスするだろう。結合価 0=1–1）を含めることもできるが、意味の点において受動化しているとは言い難い。

45 カシュブ語では be 動詞を用いて与格補語を主語化する構文は容認されない。*Òna je dëtczi dóna. これはドイツ語でも容認されないが、例えば英語ではそのような受動化が可能である。次の文と比較されたい。She was given a present.（訳：彼女はプレゼントを貰った）

基底構文（43）、受動構文（44）および受容者受動構文（45）の対応関係は、図 1 のようになる。

図 1

		受容者	行為者	被動者	述部（助動詞＋受動過去分詞）
	（44）	**ji**	òd / przez / bez niegò	to	je / òstôło wëdzelóné
		↑	↑	↑	↑
基底構文	（43）	**ji**	òn	**to**	wëdzelił
		↓	↓	↓	↓
	（45）	òna	òd / przez / bez niegò	**to**	dosta wëdzelóné

これらの対応関係から受動構文（44）と受容者受動構文（45）の共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

・共通点
1. 述部の語彙動詞（wëdzelóné）が共通である。
2. 行為者が任意の副詞句に格下げされている。

・相違点
1. 受動構文（44）では基底構文の対格補語 to が主格主語 to の位置を占めるが、受容者受動構文（45）では基底構文の与格代名詞 ji が主格主語 òna の位置を占める。
2. 述部の助動詞の部分が異なる（je / òstôło と dosta）。

これに加えて、カシュブ語の受容者受動構文は、基底構文が含む動詞が間接他動詞（いわゆる与格動詞）の場合も成立する場合がある。例えば、基底構文（46）の動詞 wdraszowac「引っ叩く」は補語として与格のみを支配し、対格は要求されない。そして（46）からは受動構文として（47）を派生することが可能であり、対格を支配する他動詞構文を受動化した場合に現れる助動詞 bëc あるいは òstac を用いた（48）は非文とされる。

（46） Walãtina Walãtémù wdraszowała.
ワレンティナはワレンティ（男性単数与格）を引っ叩いた。

（47） Walãti zôs wëpłôtk przepił i dostôł wdraszowóné òd swòji Walãtinë. (H. Wreza)
一方ワレンティは稼ぎを飲み代に使ってしまい、妻のワレンティナに引っ叩かれた。

（48） *Walãti je / òstôł wdraszowóny.

また動詞の意味が与格支配の動詞に近い場合でも、所与の動詞が対格支配の場合には受容者受動構文は成立しない。例えば（46）の動詞 wdraszowac「引っ叩く」と（49）の動詞 bùfnąc「引っ叩く」は意味が類似しているが、当該構文が成立するのは（46）のみである。

（49） Walãtina Walãtégò bùfnãła.
ワレンティナはワレンティ（男性単数対格）を引っ叩いた。

（50） * Walãti dostôł bùfnioné òd Walãtinë.

例文（43)、(44)、(45）および（46)、(47)、(49）の形式的な特徴に基づく相関関係から、受容者受動構文は、基底の能動文における与格補語を主格主語化した構文であることが確認できる。そして対格補語を主格主語化する通常の受動構文と相補関係にあり、受動構文の 1 つのパターンとして態のパラダイムに含まれていると言える。

4-2-2. 語順の傾向

多くのスラヴ諸語同様、カシュブ語の語順は全く自由とは言えないが、大きな文法的な制約もない。またその自由度はポーランド語のそれよりも高いことが指摘されている [46]。しかしながら、当該構文の語順には一定のゆるやかな傾向が観察される。

（51） bò tam dostelë zapłaconé a mielë swiéżi dëtk na przepicé. (R. Skwiercz)
だってあそこで金を支払われ、新たに飲み代を持っていたからだ。

（52） Jô mëszlã, że ten, co gòspòdarstwò dostónie zapisóné, zapłacy zark. (J. Roszman)
遺産を委ねられた人が、棺の代金を払うと私は思う。

（51)、(52）の他に（7)、(8)、(10)、(11）から観察されるのは、受動過去分詞が文末に置かれることである。これはドイツ語の受容者受動構文から借用されたことに由来する可能性があり、同様の傾向は、やはりドイツ語から借用された複合時称の場合（助動詞 miec + 受動過去分詞）にも指摘できるが [47]、(15)、(16)、(46）のような例も観察されるため、文法化の構造的な特徴の指標といえる「固定化」であるとは考えにくい。

5. 受容者受動構文の意味的特徴

5-1. 主格主語

筆者の調査によると、受容者受動構文において文法的主語になれるのは、基本的に有生物に限定され、それは特に人間であることが多い。主語が人間以外の例として（53)、(54)、(55）が得られた。(53)、(54）は無生物の主語であるが、無生物が人間の機能をしている、人間が直接的に関わっていることは明らかであり、比較的自然な擬人的拡張と考えられる。

---

46 Breza and Treder, *Gramatyka kaszubska*, pp. 174–175.

47 カシュブ語の複合時称の語順の特徴については、次を参照されたい。Motoki Nomachi, “Polska konstrukcija rezultatywno-posesywna *mam to zrobione* a kaszubskie *jô móm to zrobioné*,” *Język Polski* LXXXIV, no. 3 (2006), pp. 173–183.

（53） Kóń dostôł nabiczowóné, bò szedł za pòmału. (J. Labudda)
馬は鞭でひどく叩かれた、というのはあまりにゆっくり歩いていたからだ。

（54） Firma dostała wiele dëtków zapłaconé. (G. Schramke)
会社は多くの金を支払われた。

（55） Pòlskô pò wojnie dosta sztëk zemiów naddóné. (B. Labudda)
戦後ポーランドは幾分かの領土を与えられた。

5-2. 助動詞 dostac

4 では、dostac が文法的に助動詞として機能していることを示したが、これは意味的にも示される。すなわち、dostac が語彙動詞と助動詞とに分岐し、助動詞の場合には、本動詞とは異なり、「脱意味化」が進行して新たな文脈（すなわち「拡張」）で使用されているということである。これを踏まえ、語彙動詞 dostac の場合である（56）–（58）と、構文内に受動過去分詞を含み助動詞化している dostac の場合（59）–（61）を比較されたい。

（56） Òn dostôł nen tekst.
彼はそのテクストを受け取った（⇒　彼はテクストを持っている）。

（57） Òna dosta wszëtkò.
彼女はすべて受け取った（⇒　彼女はすべて持っている）。

（58） Òn dostôł nen zégark.
彼はその腕時計を受け取った（⇒　彼は腕時計を持っている）。

（56）–（58）は、dostac の直接補語である名詞が主格主語の所有物に変化することを意味している。つまり、ここで dostac が意味するのは、主格主語に向けられた物質の具体的な移動であり、これは語彙動詞 dostac の基本的な意味である。

（59） Òn dostôł nen tekst *przetłómaczóné* na miemiecczi. (J. Labudda)
彼はそのテクストをドイツ語に訳してもらった。

（60） Òna dosta wszëtkò rëchło *pòkôzóné*. (K. Lewna)
彼女はさっと全てを見せてもらった。

（61） Òn dostôł zégark *òbiecóné* òd tatka. (W. Kiedrowska)
彼は父親から腕時計を約束された。

例文（59）–（61）において注意すべきは、含まれている対格名詞自体は（56）–（58）と同一であるが、そこに具体的な物質の移動が生じていないことである[48]。（59）には le nié dostôł samégò tekstù（しかしテクスト自体は受け取らなかった）、（61）には le gò jesz nié dostôł（しかしまだそれを貰ってない）などの文を続けられることがインフォーマントから確認できたが、このことからも具体的な移動が無いことが確認できる。尚、（36）–（38）において、具体的な移動の対象となる対格名詞の存在が必要とされていないことも、dostac の意味が分岐している間接的な証拠となる。

また、助動詞 dostac の「脱意味化」の度合いは、語彙動詞 dostac と矛盾する意味を持つ受動過去分詞との共起の可能性から判断されうる。例えば、語彙動詞 dostac に対し dac「与える」は正反対の意味であり、さらに「失う」ことを意味する受動過去分詞と共起できるかということである。共起できるのであれば、助動詞 dostac の意味が本来の意味から高度に漂白化されていることを意味することになるのだが、筆者の調査では、語彙動詞 dostac と矛盾する意味を持つ受動過去分詞を含む例文（62）–（64）は、インフォーマントほぼ全員に容認されなかった[49]。

（62）　*Òn dostôł wiele dëtków dóné.
　　（＊彼は沢山のお金を与えられた。）

（63）　*Nen spiti dostónie to prawò jazdë zabróné.
　　（＊その飲酒者は自動車免許を取り消される。）

（64）　*Òn dostôł dwa zãbë wëbité.
　　（＊彼は歯を 2 本抜かれた。）

これは上述 Hopper が指摘する「持続」であり、語彙動詞 dostac の意味が助動詞化した後にも残存していることを示している。この現象に関連して興味深いのは、形式的にはカシュブ語よりも低い文法化の度合いを呈する上ソルブ語の例である。例文（65）、（66）からもわかるように[50]、上ソルブ語では、カシュブ語よりも助動詞の「脱意味化」が進んでいるこ

48　例えば（59）と（59a）Òn dostôł nen przetłómaczóny na miemiecczi tekst.（訳：彼はドイツ語に翻訳されたあのテクストは受け取った）は区別されなければならない。後者における dostac は語彙動詞である。（59）は przetłómaczóné という状況を受容しているのであり、dostac と przetłómaczóné には「同時性」がある。これに対し（59a）は「翻訳し終わったテクストを受け取った」という意味であるから、dostac と受動過去分詞の間に「同時性」はない。

49　（63）、（64）に関して、インフォーマントの 1 名は、「確信はないが言えなくもない」という回答をした。このインフォーマントはハンブルグ在住で、ドイツ語を日常的に用いていること、そしてドイツ語では（63）、（64）に意味的に対応する文が可能であることを考慮に入れるとカシュブ語の構文としては疑問が残る。尚、ドイツ語ではそれぞれ Er bekam zwei Zahne ausgeschlagen、Der Betrunkene bekam die Fahrerlaubnis entzogen となる。例文（62）の構文はドイツ語でも不可能であり、これは語彙動詞の意味が完全には「漂白」されていないことを示している。

50　これらの例文はソルブ研究所の Sonja Wölke 教授から提供をうけた。

とを意味している[51]。

（65） Pjany dósta jězbnu dowolnosć sćazanu.
（その飲酒者は自動車免許を取り消される。）

（66） Wón je dwaj zubaj wubitej dóstał.
（彼は歯を 2 本抜かれた。）

5-3. 受動過去分詞

4-2. で示したように、当該構文は基底構文の動詞の与格補語を主格主語化した構文であるが、与格を支配する全ての動詞が受動者受容構文に変形可能なわけではない。本稿の注 33 に挙げた Cybulski の与格支配の動詞リスト（完了体動詞のみ 336 語）をもとに、アンケートを作成しインフォーマント調査を行ったところ、当該構文がカシュブ地方全域に存在することは確認できたが、その使用範囲には、同じ方言内でもかなりの個人差があることが判明した。最も高い容認度を出したインフォーマントは約 66％（224/336）、最も低い容認度を出したインフォーマントは全体の 11％（40/336）程度であり、しかもその際に容認された動詞は必ずしも一致するわけではなかった。したがって、当該構文を派生しうる動詞の意味的な分類は困難だが、比較的容認度が高かったのは、いわゆる与格の要素が補語として必須である以下のグループである。

第 1 グループ：dac「与える」に意味的な修飾を加えた動詞（但し dac は不可）
pòdac「差し出す」、dodac「付け加える」、zadac「課す」、nadac「授ける」、òfiarowac「寄付する」、pòdarowac「プレゼントする」など
第 2 グループ：płacëc「払う」に意味修飾を加えた動詞
zapłacëc「支払う」、wpłacëc「払い込む」、 òpłacëc「支払う」など
第 3 グループ：dzelëc「分ける」に意味修飾を加えた動詞
przëdzelëc「分ける」、wëdzelëc「割り振る」、ùdzelëc「分ける」など
第 4 グループ：遂行動詞
nakazac「命じる」、rozkazac「命じる」、pòdzãkòwac「感謝する」など
第 5 グループ：「殴る」を意味する動詞[52]
wprac「（顔を）はたく」、wdraszowac「殴る」、wczubaszëc「平手打ちをする」など

これらのグループのうち 1–3 は、広い意味の「授与動詞」としてまとめることができる。

51 尚、Lötzsch によれば、既に 1811 年のテクストに Ta hołca hłowu wotćatu dósta（訳：彼女は頭を切り落とされた。）といった語彙動詞 dostac の意味と矛盾する例が認められる。Lötzsch, “Zum indirekten Passiv,” p. 106. しかし、ソルブ語においてもやはり動詞 dać の受動過去分詞と組み合わせた構文は不可能なため、やはり語彙動詞の意味的な残存が認められる。

52 これらの中で特筆すべきは第 5 グループである。ドイツ語では与格のみを支配する第 5 グループのような動詞は存在せず、これはカシュブ語で独自の発展を見たグループと言える。

以上全てに共通していることは、動詞が状況変化を表す場合のみに受容者受動構文への変形が認められるということであり、その際行為の前後で大きな状況変化が想定されることである。これは当該構文の成立に「他動性」と「結果性」の大きさが重要であることを示している。

したがって、基底構文で意味役割から見て必須ではない与格が用いられる場合（例えば、いわゆる「倫理与格」、「関心の与格」など）に、その与格を主客主語にすることはできない（例文（68））。

（67） Jabkò spadło mù na głowã.
りんごが彼の頭に落ちた。

（68） *Òn dostôł òd jabka na głowã spadłé.

また、与格が基底構文の必須の要素であっても、「他動性」や「結果性」に直接的に結びつかない場合には変形が認められない。したがって動詞 ùwidzec sã「気に入る」を含んだ例文（69）から（70）を派生することは認められない。

（69） Nen knôp mie sã baro ùwidzôł.
私はその青年を大変気に入った。

（70） *Jô dostôł baro ùwidzóné sã òd knôpa.

5-4. 受容者受動構文のおかれる文脈

基底構文と派生構文は、構文としてのモデルは異なるが描写される状況そのものは同様である。しかし両者の意味あるいは機能は異なるため、どの文脈においても基底構文と派生構文を自由に置き換えられるわけではない。

受容者受動構文では、特に上に述べた「結果性」が主格主語へのエンパシーと関係し、発話として強い感情的なニュアンスを帯びることが珍しくない。インフォーマントによれば、例えばコンテクストがない場合には例文（71）は不自然に聞こえるが、（71a）のように行為の結果が主格主語にとって影響が大きいと考えられるような状況においては可能になるという[53]。

（71） ?Jô dosta dwiérze zamknioné.
（？私はドアを閉められた）

（71a） Słëchôjta, jô dosta dwiérze zamknioné przed nosã!（B. Labudda）
聞いてよ、私は目の前でドアを閉められたのよ！

53 但し（71）、（71a）ともに不適切であると指摘したインフォーマントもいた。

（71）と（71a）の容認度に対する違いは、後者の方が生じた事象に対して感情的であり、対話者に対して感情的に訴えかけている点、さらに「目の前で（逐語では「鼻の前で」）」と状況の緊迫感が伝えられている。（71a）は単なる状況の描写ではなく、「受容者」が行為の及んだ結果「被害者」としての状況にあることをより明確にしていると言える。この点において、示唆的であるのは次の例の対比である。

（72） ?Jô dosta rëbë nałożoné.
（？私は魚を盛られた。）

（72a） Jô dosta nałożoné fùl talérz rëbów.（J. Labudda）
私はお皿一杯に魚を盛られた。

以上は食事のときに魚がお皿に盛られた状況を述べているものだが、インフォーマントによれば（72）は単独では不自然であるが、（72a）は「お皿一杯」という表現を付け加えることで可能になるという。これは行為の結果が主格主語にとって特に何らかの影響を与えた重要な要素であるということが示されており、このような特殊な文脈において当該構文が可能になる[54]。

6. 文法化の通時的側面

6-1. 文法形式と意味変化の対応

これまでの共時的な資料に基づく文法的および意味論的分析によって得られた結果は、主に次の 2 点にまとめられる。

1. 文法（形式）的側面：受動過去分詞の中性単数形が「義務」的に使用、「助動詞 dostac ＋受容過去分詞」という分析的な動詞一形態である「パラダイム化」、派生構文としての構文システムに統合、ある程度の「語順の固定化」の傾向といった比較的高度な文法化の特徴が観察される。
2. 意味（機能）的側面：「脱意味化」による語彙動詞の助動詞化および使用範囲の拡張が認められるものの、受動過去分詞の意味的制限が見られ、また変形できる語彙も一定しておらず、さらに文脈（語用論）的な使用制限が強いため、文法化の度合いは高くはない。

文法化は、文法形式と意味内容の二つの局面が相互に影響しあって生じる変化であるから、カシュブ語の受容者受動構文における両局面の不均衡が奇妙に思われる。このことは、例えばソルブ語の受容者受動構文は形式的にはカシュブ語よりも文法化の度合いが低いが、意味的な使用範囲はより広いことからも指摘できる。

54 例えば「魚が嫌いで食べたくないのにたくさん盛られてしまった」あるいは「少ししか期待していなかったのに、魚をたくさん盛ってくれた」といった文脈が想定される。

ここでカシュブ語の受容者受動構文の文法化のプロセスを考える前提として、当該構文のモデルであるドイツ語の bekommen 受動の文法化のプロセスを参照する。Gabriele Diewald の見解をもとにまとめると、このプロセスで重要なのは統語的な切れ目の移動あるいは統語的再分析であり、それは大まかに図 2 のような段階を経てきたと考えられる[55]。

図 2

ステージ 1.　X bekommen Y
ステージ 2.　X bekommen [Y + Z]　←Z の付加による「特化」
ステージ 3.　X [bekommen Z] + Y　←統語的再分析
ステージ 4.　X [bekommen Z]
（X ＝主格名詞句（基底構文では与格補語）、Y ＝対格名詞句、Z ＝受動過去分詞）

「ステージ 1」では bekommen は語彙動詞であるが、「ステージ 2」の段階で Z が文に付与され、その意味が特化される。「ステージ 3」の段階では、本来的には文の形容詞的補語であり、Y と文法的一致があった Z が、[動詞 bekommen ＋ Z] と統語的に再解釈されたことにより、bekommen 受動の文法化の初期段階が生じている。「ステージ 4」はさらに文法化が進んだ状態で、既に対格補語の要素は省略され（あるいは最初から対格要素を要しない与格動詞）、与格支配をする動詞から派生した受動過去分詞と、既に助動詞化した bekommen が結合している。

これらの段階は形式と意味が足並みをそろえて変化するわけではないので、文法化が起こった最初の段階では、対格名詞と受動過去分詞の間に文法的一致が確認されても、意味としては既に名詞の定語としての意味ではなく、受容者受動の意味を持ちうる段階がある。これは例文（19）–（28）が示すように、西スラヴ諸語とスロヴェニア語は意味的には受容者受動を有しながら、形式的には対格補語と受動過去分詞の文法的一致が義務的であり（文構造としては統語論のカテゴリーに属している）文法的カテゴリーが明確にはなっていない。一方ブルゲンラント・クロアチア語の例（17）、（18）における文法的一致の不安定さを呈しながらも、意味的には一義的に解釈されている状態は、まさに図 2 のプロセスの統語的再分析が進行していることを示唆している。

上記のように、受動過去分詞を付与することで「特化」し、さらに統語的な再解釈を経て文法化が進行することは、複合時称（いわゆる所有完了）の文法化のプロセスと同一のパターンである[56]。

55　Gabriele Diewald, *Grammatikalisierung: Eine Einführung in Sein und Werden grammatischer Formen* (Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1997), p. 34.

56　このことに関しては、Tania Kuteva がブルガリア語の例を用いて紹介している。次を参照されたい。Tania Kuteva, *Auxiliation: An Enquiry into the Nature of Grammaticalization* (Oxford: Oxford University Press, 2001), pp. 40–42.　但し、Nitsolova が正しく指摘するように、ブルガリア語において当該構文は完全な文法化には到達していない。Ruselina Nitsolova, *Balgarska gramatika: Morfologia* (Sofia, 2008), p. 270.

6-2. 受容者受動構文の通時的側面

2-2. に挙げたコーパスを調査した結果、受容者受動構文の使用頻度が非常に低く、特に3の歴史的テクストには一例も見当たらなかった[57]。当該構文は特に口語的な構文であり、またそもそも19世紀までは記録されることも少なかった言語であるから、カシュブ語において、いつ、どのような形で現れ、発展していったかを正しく指摘することは不可能であるが、その最も古い記録はFriedrich Lorentzが19世紀末から20世紀初期にかけて方言調査で記録したものである[58]。

（73） Òn dóstôł tą skórą dobrze zapłacóné.（Teksty pomorskie）
彼はその毛皮（女性単数対格）によい金が支払われた。

（74） Ten prachôrz krëgôł pôrą skórzeń pòdaróné.（Pomoranisches Wörterbuch）
その乞食は長靴を一足（女性単数対格）貰った。

（75） A-tāko ako-vün- krå svė-pjìršė mjüne fiçklė....（Slovinzische Texte）
そして彼が自分の最初の名前（中性単数対格）を言われたとき…

（76） Te-nā- kra vjiękä pjoų3i podarŏųnė.（Slovinzische Texte）
そのとき彼女は沢山のお金（女性複数属格）を貰った。

（77） Te-von sä pùosa3ė nåų-tå-kùońa, có-tą-skóurą krŏųl přăšätė.（Slovinzische Texte）
そして彼は鞍（女性単数対格）が取り付けられた馬にまたがった。

興味深いことに、他のスラヴ諸語のように対格補語の名詞句と受動過去分詞が文法的に一致をみる例は1例も見つからなかった。(75)は対格名詞mjüne「名前」が中性名詞であるため、外見上は受動過去分詞fiçklė「言われた」と文法的に一致するが、他の例では、受動過去分詞が中性単数形であり、それぞれの補語との間に文法的な一致がないため、ここでも文法的な一致があったとは考えにくい。このことは、当該構文は使用頻度が低いにも関わらず、少なくとも文法形式の上では上述の「ステージ3」に達しており、19世紀末の時点で動詞の1パラダイムとして、既に高度に文法化した形式を有していたことを示している。

6-3. 複合時称（所有完了）の文法化

カシュブ語の複合時称は、次の（78）のような構造をとる。その際、受動過去分詞の意味次第で、4の要素の有無が決まる。

---

57 3の歴史的テクストに関して、オリジナルのドイツ語テクストでは助動詞habenを用いた複合時称の例が17あるが、その翻訳である3には複合時称の例は一つもない。

58 フォントの都合上、（73）と（75）は現代語の正書法を用いて表記する。

（78） **1.** 主格主語 ＋ **2.** 助動詞 miec ＋ **3.** 受動過去分詞（中性形） ＋ **4.** 対格補語句

これは助動詞 haben ＋受動過去分詞という構造の複合時称を有するドイツ語の影響を長期にわたって受けた結果、カシュブ語では「結果性」を表す構文「動詞 miec ＋受動過去分詞＋対格補語句」が「助動詞 miec ＋受動過去分詞＋対格補語句」に統語的再解釈されて文法化に進んだことに端を発し、それは既に動詞パラダイムに変化したことが知られている[59]。その具体的なプロセスについては Motoki Nomachi が既に述べているのでここでは繰り返さないが[60]、カシュブ語では複合時称の文法化の度合いは高度であり、その使用頻度も受容者受動構文に比べて遥かに高い[61]。その際、受容者受動構文同様、受動過去分詞は不変化の中性単数形のみが可能であり、その選択は「義務化」されている。

Gilferding が記録した 19 世紀半ばのスロヴィンツ方言のテクストでは、既に複合時称が高度に文法化していることがわかるが[62]、中には受動過去分詞が中性化せずに、対格補語と文法的一致を示す例がいくつか見られる。

（79） Moj wotc mie miol przedónowo zlemu duchu.
私の父は私（対格）を悪魔に引き渡した（受動過去分詞男性単数対格形）。

（80） Te ne se miale wuzdą uczinionų woed grzewe.
そこで彼らはキノコで轡（対格）をなんとか作った（受動過去分詞女性単数対格形）。

（81） Ale nasz ksądz mu mieł dôną pâliczką.
しかし私たちの神父は彼に杖（対格）を渡した（受動過去分詞女性単数対格形）。

---

59 カシュブ語において、結果性を表す構文は「動詞 miec + 受動分詞過去（対格）＋対格補語句」で実現する。この構文は、先行する動作が既に終了して、その結果が発話時点において残存している状態を意味する。助動詞 miec を用いた複合時称と似ているが、「結果性」を表す構文は、受動過去分詞と対格補語は基本的に文法的一致が義務付けられている。Jô móm ksãżkã（女性単数対格）òbieconą（女性単数対格）（訳：私は本が約束されている。⇒発話以前に「私は本を貰う」という約束をされ、その結果が現在に続いている）。また「結果性」が示すのは、動作ではなく状態であり、当該構文の主格主語は行為者ではなく、状況への参与者を示す。したがって、以上の例文では、主格主語の jô は意味的には動作の受容者を表す（すなわち「私」は本を約束された人）。これに対し、迂説形式が表すのは動作であり、主格主語は行為者であるため、例えば Jô móm ksãżkã（女性単数対格）òbieconé（中性形）（訳:私は本を約束した）という文においては主格主語の jô は「約束した」人であり、表す内容も「約束した」という動作的な意味になる。

60 Motoki Nomachi, “On a Periphrastic Perfect in Kashubian Literary Language,”『西スラヴ学論集』11 巻、2008 年、4–23 頁。

61 受動過去分詞の中性形が義務化、パラダイム化が生じ、さらに助動詞の脱意味化も高い段階にあり、本動詞 miec と矛盾する意味の動詞とも結合しうる。また受動過去分詞は完了体・不完了体双方から派生しうるが、不完了体の動詞からの派生には意味的な制限がある。詳しくは Nomachi, “On a Periphrastic Perfect” を参照されたい。

62 Gilferding, *Ostatki slavian*, p. 399.　ここで Gilferding は ja mom zaběto（訳：私は忘れた）、on miol zapisône（訳：彼は書き付けた）といった受動過去分詞が中性形の例のみを挙げている。

20世紀初頭のLorentzの研究では、(79)–(81)のような文法的に不一致な形式は、北部方言、特にスロヴィンツ方言で散見されることが述べられているが[63]、実際には他の地域でも比較的まれではあるが観察される。中部地方出身の作家の例である(82)では動詞dostac「得る」の受動過去分詞と女性名詞dërgòtka「熱」の対格形が、北部地方出身の作家の例である（83）では動詞zabëc「忘れる」の受動過去分詞と女性名詞palëca「杖」の対格形が文法的な一致を示している。

（82） Kò òn ju miôł dostónądërgòtkã. (J. Mamelski)
だって彼はもう熱（対格）を出してしまった（受動過去分詞女性単数対格形）のだよ。

（83） Miôł palëcązabëtã. (A. Budzisz)
彼は杖（対格）を忘れた（受動過去分詞女性単数対格形）。

例文（82）と（83）は、形式的には「受動過去分詞＋名詞」という統語的な結合がmiecの対格補語句となっているが、これらの例文は受動過去分詞が中性形の場合と同じように、一義的に完了の意味に解釈される。

今日のカシュブ語においては、当該構文における受動過去分詞の中性化がほぼ規範化しており、受動過去分詞と対格補語の文法的一致が無い場合がほとんどである。これは、動作結果の状態を示す「結果性」を表す構文との意味的近さからの混同の可能性があることも考えられるが、いずれにせよ、このような「揺れ」は、複合完了形の文法化が完全には終わっていないことを示している。

6-4. 受容者受動構文と複合時称の比較

上述の受容者受動構文および複合時称の文法化の通時的側面の特に重要な特徴は、次の2点としてまとめられる。

1. 受容者受動構文：使用頻度が低いにも関わらず、記録された最初の資料の時点で、対格補語と受動過去分詞は文法的に不一致であり、形式的には高い文法化の度合いを示す。現代でも受動過去分詞は基本的に中性形のみが見られる。
2. 複合時称：使用頻度が高いが、記録された最初の資料の時点では、文法化の初期段階で見られる対格補語と受動過去分詞に文法的一致が見られる場合もある。分詞と補語の文法的一致は時代を下るとともに減るが、現在でも一致する場合は皆無ではない。

1と2が示唆することは、カシュブ語において受容者受動構文と複合時称の文法化のパターンが異なるということである。つまり、複合時称は、図2で示したドイツ語のbekommen受動と同じように、段階を追って文法化が進行したのに対し、受容者受動構文の場合は段階的な発展はなく、最初から文法化の度合いが高いステージ3および4の段階で構文が借用さ

63 Lorentz, *Geschichte der pomoranischen*, p. 173.

れたということである。このことにより、受容者受動構文の形式的な文法の高さと意味的な文法化の低さの関係を説明することができる。

この点において、カシュブ語は当該構文を有する他のスラヴ諸語と異なる。例えば、下ソルブ語は動詞 kry(d)nuś をまず語彙動詞と借用し、その後ドイツ語の影響を受けつつ、受容者受動構文が文法化していったことが知られており[64]、したがって受動過去分詞と名詞補語の間に文法的一致が観られるが、意味としては受容者受動という図 2 の「ステージ 2」と「ステージ 3」の移行的地点にある。すなわちカシュブ語とは異なり、段階的な発達の様子を呈しているのである。

では、なぜカシュブ語において、同じようにドイツ語から「文法的レプリカ」として借用された複合時称と受容者受動構文で文法化のプロセスが違うのかということが疑問となる。これは複合時称の文法化の高さと使用頻度に関係すると考えられる。すなわち、カシュブ語は複合時称という「受容者受動の文法化の結果としてのモデル」を既に有していたという点が特異なのである。受容者受動構文と複合時称双方の明らかな構造的類似（助動詞以外の要素は共通）と意味的類似（dostac は miec の「開始相」であり、意味的に類似していること[65]、双方とも「状態」ではなく「動作」を示すことなど）があるため[66]、受容者受動構文は既に高度な文法化を呈していた複合時称からの類推により用いられるようになったと考えられよう[67]。これに関し、本稿で言及したソルブ語および他の西・南スラヴ諸語は高度に文法化した複合時称を有さず、文法化のモデルとなる構造が存在していなかったというのは示唆に富む事実である。

第 2 次世界大戦以後のカシュブ地方は、もはやドイツ語文化の影響下にはなく、今日のカシュブ語話者のうち、ドイツ語とカシュブ語を母語とする世代は減り、ドイツ語教育を受けていない者、ドイツ語を全く知らない世代も多い。彼らが受容者受動構文を使用するのは、もはやドイツ語との 2 言語併用状況で生じるドイツ語からの干渉によるものではなく、むしろカシュブ語内における構文同士の干渉の結果であると考えるのが自然であろう。

---

64 このことに関しては次を参照されたい。Nicole Nau, *Möglichkeiten und Mechanismen kontaktbewegten Sprachwandels unter besonderer Berücksightingung des Finnischen* (Munich: Lincom Europa, 1995), p. 107.

65 その示唆に富むエッセイで、A. V. Isachenko は have 言語において get 動詞と have 動詞は非常に近接的な関係あることを述べたうえで、get や obtain の意味を持つ動詞は、have の開始相の意味、すなわち「持ち始める」の意味として解釈されることを指摘している。Aleksander V. Isachenko, “On *have* and *be* Languages: A Typological Sketch,” in Michael S. Flier, ed., *Slavic Forum: Essays in Linguistics and Literature* (Hague: Mouton, 1974), pp. 66–67.

66 尚、これは筆者のアンケート調査の最中にも、少なからぬ数のカシュブ語話者が、アンケート調査開始時すぐに、あるいは途中において受容者受動構文と複合時称を混同することがあったが、これは母語話者の感覚および内的観察としても、双方が極めて類似していることが原因と考えられる。

67 カシュブ語とは異なり、複合時称を持たない他のスラヴ諸語では、受容者受動構文において受動過去分詞と対格名詞句の文法的一致が基本的に義務付けられていることも示唆的と言える。

7. おわりに

本稿ではこれまで研究されてこなかったカシュブ語の受容者受動構文について、主にその文法的な特徴と意味的な特徴の分析・記述を行い、得られた結果として以下のことが挙げられる。

1. 文法的側面 1（形態論レベル）：受動過去分詞の中性化が見られ、助動詞 dostac ＋受動過去分詞という動詞の分析的形式を呈し、動詞のパラダイムに含まれている。
2. 文法的側面 2（統語論レベル）：基底構文における与格補語を主格化した受動構文として機能している。
3. 意味論的側面：脱意味化により語彙動詞から分岐して助動詞になる一定の文法化の傾向を示すが、構文が成立するための意味的な制限は大きく、文法化の度合いは形式レベルに比べると低い。
4. 通時的側面：受容者受動構文は、記録が残る最初期の段階から、使用頻度が低いにもかかわらず、形式的には高い文法化のレベルを呈しているが、この形式的側面と意味的な側面との乖離は、受容者受動構文の借用方法にある。カシュブ語の受容者受動構文のモデルは確かにドイツ語にあるが、それはカシュブ語の中における段階的な文法化ではなく、既に「できあがった」形を借用した結果によるものである。そしてその高度な文法化形式の背景には、構造と意味の多くの点において共通点を持つ複合時称の存在があり、そこで構文間の類推が働いている。

以上の結論のうち、4 は 1、2、3 に比べると弱いと言わざるをえない。通時的変化が追跡できる資料が根本的に乏しく、また当該構文の頻度が非常に小さい以上、その分析には限界がある。しかしながら、文法化のプロセスが一言語内においても一様ではないこと、また同一構造の文法化のプロセスがスラヴ諸語の中でも複数あることは、スラヴ諸語の通時的・共時的類型論研究において興味深い事実である。本研究の結果は、受容者受動構文を持つ他のスラヴ諸語との比較研究を進めることで、より充実した結論になることが期待できるが、それは今後の課題である。

О кашубском реципиентном пассиве и его грамматикализации

Номати Мотоки

Кашубская глагольная система, как и аналогичные системы других славянских языков, имеет две морфосинтаксические формы пассива:

1. конструкция со вспомогательным глаголом *bëc* «быть» (или *òstac* «стать») и страдательным причастием на *-n-*, *-t-* и *-ł-*.

2. конструкция с морфемой *sã* «ся».

Считается, что кроме этих двух конструкций в кашубском языке существует еще одна конструкция с глаголом *dostac* «получить» (или *dostawac* «получать») и страдательным причастием в среднем роде. Пример (1) показывает, как она выглядит:

(1) *òn* to dostôł (òd / przez / bez ni) przëdzelóné.
(букв. «он это получил от нее распределенное»)

(2) òna *mù* to przëdzelëła.
(она ему это распределила)

(3) To bëło mù (òd / przez / bez ni) przëdzelóné.
(это было ему распределено (ею))

Предложение (3) является пассивной формой исходного предложения (2), а пример (1), в свою очередь, можно считать пассивной формой примера (2). При этом различие между (1) и (3) состоит в том, что в одном случае (1) косвенное дополнение в дательном падеже *mù*, которое в случае (2) играет семантическую роль реципиента в предложении, становится пассивным и также получает статус грамматического субъекта *òn*. В примере (3) пассивную форму приобретает местоимение *to*, которое является прямым дополнением глагола в (2). При этом нет сомнения в том, что не происходит изменения логического содержания данных высказываний, поэтому в лингвистической литературе конструкция типа (1) называется реципиентным пассивом.

Кашубский реципиентный пассив происходит из кальки так называемого немецкого «bekommen Passiv» типа *Ich bekam das Buch geschenkt*, в котором данная конструкция уже в сравнительно высокой степени грамматикализована. Поэтому специалисты по германским языкам часто анализируют ее в рамках исследования категории залога и иногда включают в парадигматику глагола, но в изучении кашубского языка названная конструкция раньше никогда не подвергалась систематическому анализу и не была описана в научной литературе. Мы, следовательно, пока не знаем, в какой степени реципиентный пассив грамматикализован в кашубском языке.

С учетом вышесказанного в настоящей статье реципиентный пассив рассматривается в синхронном срезе и сопоставляется с другими славянскими языками, во-первых, в грамматическом (формальном) отношении, во-вторых, в

семантическом (функциональном) отношении в рамках теории грамматикализации, которая была введена в лингвистическую типологию Б. Гейне и Т. Кутевой. В конце статьи осуществляется попытка диахронического описания названного пассива в сравнении со степенью грамматикализации описательного посессивного перфекта, который также проник в грамматическую систему кашубского языка под влиянием немецкого.

Как результат проделанного анализа предлагаются следующие выводы:

1. Грамматическое отношение
   - На уровне морфологии: наблюдается строгое соблюдение употребления страдательного причастия окаменевшей в среднем роде формы и тенденция к парадигматизации глагола с причастием в качестве описательной формы глагола, что считается характерными для грамматикализации признаками.
   - На уровне синтаксиса: названная конструкция является результатом деагентизации исходного предложения и пассивизации дополнения в дательном падеже – она и играет дополнительную роль в парадигматической системе предложений.
2. Семантическое отношение
   - Наблюдается тенденция к десемантизации глагола *dostac*, который действительно функционирует в качестве вспомогательного глагола в названной конструкции, хотя не все глаголы, управляемые дательным падежом, становятся при этом пассивными. Условиями формирования конструкции являются также ясные значения результативности и переходности глагола. Данный факт затрудняет оценку степени грамматикализации в семантическом отношении.
3. Диахроническое отношение
   - Названная конструкция обладает высокой степенью грамматикализованности с самого начала ее фиксации, по крайней мере, в формальном отношении. Это является результатом не столько калькирования данной конструкции из немецкого языка, сколько взаимного влияния внутри грамматической системы в кашубском языке, а именно влияния высоко грамматикализованного описательного перфекта, который состоит из сходных с реципиентным пассивом элементов и имеет подобное значение.